

2024.9
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみや 富 薬

9号

第46巻
No.422



コケモモ *Vaccinium vitis-idaea* L.

(ツツジ科 *Ericaceae*)

- 生薬** コケモモ葉 夏から秋にかけて、葉のついた枝ごと刈取り、蒸した後陽乾する。葉を集め、加熱乾燥する。
- 成分** フェノール配糖体：arbutin, acetylarbutin, caffeolar butin、フラボノイド：hyperin, isoquercetin, proanthocyanidin、トリテルペノイド：ursolic acid、タンニン等。
- 効能** ウワウルシの代用品として『第五改正日本薬局方』の追補（1935）から『第七改正日本薬局方』（1961 - 1971）まで収載された。尿路殺菌剤として腎盂炎、尿道炎、膀胱炎に用いる。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



最終氷期（11万年～1.5万年前）が終わり、現在は間氷期の時期にあたります。北半球にある寒冷地の植物は氷期の時代に南下し、間氷期には北上しますが、高山帯などに取り残された寒冷地の植物があります。これを周北極要素の植物といい、コケモモもその一つです。ユーラシアの北部や北アメリカ北部などの寒帯から高山帯など、日本では、北海道、本州、四国、九州などの亜高山から高山などに分布し、ハイマツ帯や草地、岩場、砂礫地などに自生し、高さは10～20cm、茎の下部は匍匐する常緑低木です。地中の根茎を広げることで株を増やします。葉は、密につき互生し長さは1～2cmの長楕円形～倒卵形で、先は丸く全縁、革質で光沢があります。花は6～7月頃に、枝先に白色～淡紅色で5mmほどの鐘型の花を3～8個ほど総状に付け、下向きに咲きます。果実は、直径10mmくらいの球形の液果で赤く熟します。果実をcowberryと呼び、甘みとほどよい酸味があり、砂糖などを加えて煮詰めて、ジャムやコンポート（砂糖煮）、ジュース、シロップ、ゼリー、アイスクリームなどに加工します。ホワイトリカーに漬けたコケモモ酒も疲労回復に絶品です。栽培による量産化ができず、長野県の観光地など一部でしか賞味できないことは残念です。

属学名の*Vaccinium*（スノキ属）はラテン語の*vaccinus*（牡牛の）由来で、英名でcowberryと呼ぶのと同じで牛が好んで食べる果実であったことから付いた名と考えられます。また、種小名の*vitis-idaea*はラテン語の*vitis*（ブドウ）と*ida*（イダ山）の合成語で、「イダ山のブドウ」の意です。イダ山はギリシア神話に出てくるクレタ島の最高峰Idē（2456m）のことだとされています。和名の「コケモモ」は「苔桃」、苔のように地面を這うように枝を伸ばし、小さいが桃のような赤い果実を付けることから名付けられました。

薬としての利用は比較的新しく、『日本薬局方』に初版(1886)から記載されているクマコケモモ(*Arctostaphylos uva-ursi*)は全量スペイン、フランス、ドイツなどから輸入していましたが、昭和の始頃にヨーロッパからの輸入が途絶えた時、同じツツジ科で国内で自生があり、主成分のarbutinを5%前後含有するコケモモを代用品として『第五改正日本薬局方』の追補(1935)に記載し、『第七改正日本薬局方』(1961～1971)まで記載し、利用していました。しかし生育地の高山帯や北海道などの寒冷地などは自然保護区などが多く、乱獲すると絶滅の恐れがあり、また栽培も難しいことから、供給ができなくなったことと、ウワウルシの輸入が再開されたことから削除されました。

クマコケモモはヨーロッパの山岳地帯、アメリカ北部、カナダなどに自生するツンドラ植物です。属学名の*Arctostaphylos*（ウラシマツツジ属）はギリシア語の「*árctos*（熊）」と「*staphylos*（ブドウの）」の合成語で、「熊のブドウ」を意味し、また種小名の「*uva-ursi*」は音読みすると「ウワウルシ」でウルシ科植物と勘違いされそうな名前ですが、ラテン語の「*uva*（ブドウ）」と「*ursi*（熊）」の合成語で属学名と同じく「熊のブドウ」の意味です。英名の「bear berry（熊の果実）」も同様で、「熊がよく食べる木の果実」といったところです。和名の「クマコケモモ」の「クマ」も同じ意味と思われます。常緑の小低木で、低く伏して伸長する茎から直立する茎を分枝し、高さ50cmほどになります。葉は互生し、葉身は厚みがあり革質、鈍頭または凹形で倒卵状からへら状です。花は淡紅白色、小さなつぼ状で春から初夏に咲きます。果実は球状で秋に紅熟し、中に種子が5つあり、ヨーロッパでは古くから果実を食べていたようですが、酸味が強く現在はあまり食用とはしていません。アメリカインディアンは葉をハーブに混ぜてタバコとして喫煙していました。（村上守一 記）